

太田泰友 ブックアーティスト

八戸ブックセンターがオープン5周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。2019年にギャラリー展として個展を開催していただいてから、3年の月日が流れました。あっという間だったという感覚もありますが、いろいろなことが自分の中に、そして世の中に起きた時間でもあり、八戸ブックセンターもきっと様々なことを乗り越えてたどり着いた5周年だったのだろうと想像します。

2019年の2月から4月にかけて開催された「太田泰友ブックアート展 背を見て育つ」。僕にとってこの展示は特別な存在で、2017年にドイツから日本に拠点を移して以降初めての個展であったことから、日本での活動のスタート地点のように思っています。

八戸ブックセンターには多様な機能とセクションがありますが、僕の思い入れが最も強いのはやはりギャラリーです。「背を見て育つ」展で発表した「Book-Composition 22—Atlas from 1896」という作品は、八戸ブックセンターのギャラリーの大きさに合わせて、当時の僕にとっては最大サイズの作品として挑戦したものでした。おそらくその時には、この作品がしばらくは最大のものになるだろうと考えていたように思いますが、ここで得たスケール感がきっかけとなり、その後もっと大きな作品の制作が続いていくことに。そういう意味でも、八戸ブックセンターのギャラリーは僕にとっての出発点なのです。

「本のまち」の「本のある暮らしの拠点」の中にあるホワイトキューブは、このような大いなる可能性を秘めた核なのだと思います。これからもこのギャラリーが、本の可能性を大きく広げる一歩が踏み出されていくような場所として、ここに存在し続けてくれることを願って止みません。

八戸ブックセンターでの思い出として忘れられないのは、ここで出会った方々の温かさです。寒い冬でしたが、スタッフの皆さまには温かな素晴らしいサポートをしていただきました。八戸のまちを案内していただいたのも、とても鮮明に覚えています。季節が春になって開催されたトークイベントのときにも、お集まりいただいた皆さまと楽しい時間を過ごさせていただきました。会期中、何度も会場に足を運んでくださった方から、僕の作品をテーマに短歌を贈っていただいたことも大切な思い出です。

トークイベントに東京から駆けつけてくれた人が、今では東京・武蔵小山のアトリエから本の新たな可能性と一緒に発信するチームの仲間になってくれたり、ご登壇いただいた内沼晋太郎さんとは、新しく拠点を構える長野・御代田町で顔を合わせたりと、不思議な縁がつながっていく場でもある八戸ブックセンター。

またここで、ここからスタートした活動の進化した姿をご覧いただける日が来るのを楽しみに、八戸ブックセンターの益々の発展を祈っています。

太田泰友 yasutomo ōta

ブックアーティスト

「背を見て育つ」(2019)

1988年山梨県出身。OTAブックアート代表。2017年、日本人初となるドイツにおけるブックアートの最高学位マイスターシューラー号を取得。同年、ブックアートを追求・発信する拠点として、アトリエ「OTAブックアート」を東京に設立し活動している。

